

佐倉道と水戸佐倉道分間延絵図について

山本 光正

はじめに

郵政博物館には貴重な資料が多数収蔵されている。その中でも最も注目される貴重な資料は『五海道分間延絵図』^①である。

『五海道分間延絵図』については、杉山氏の研究成果^②があるので、ここでは分間延絵図の概要について贅言を尽くすことはしない。

本稿で取り上げる『水戸佐倉道分間延絵図』は『五海道分間延絵図』の中でも、一見すると不可解な点が多く、時に館外の研究者からの問合せもあると言う。そこで本稿では『水戸佐倉道分間延絵図』が作成された経緯について述べていくことにする。

なお、水戸佐倉道については発表^③したことがあるが、本稿は『分間延絵図』の観点からの考察である。

一 『水戸佐倉道分間延絵図』に描かれた水戸道と佐倉道

(一) 『五海道分間延絵図』と『水戸佐倉道分間延絵図』について

『五海道分間延絵図』については前述のように杉山論文等に詳しいが、本稿執筆のため若干触れておくことにする。

『五海道分間延絵図』は三部作成され、一部は献上本として幕府に納められ、現在は東京国立博物館に収蔵されている。残る二部は道中奉行所に取められたものと考えられる。但し道中奉行は独立した奉行ではなく大目付と勘定奉行の兼帯であった。そのため二部は大目付と勘定奉行のもとに取められたものであろう。

以上の二部のうちの一部が郵政博物館に収蔵されているわけである。推測であるが郵政博物館に収蔵されている『分間延絵図』は勘定奉行のもとにあったものと考えられる。それは杉山が指摘しているように書き込み等があり、実務に利用していたためである。大目付ではこれほど『分間延絵図』を利用しなかったであろう。

『分間延絵図』には共に作成された全国街道の模式図である『諸街折絵図』が付属するが、郵政本には欠けている。郵政本に付属すると思われる『諸街折絵図』は現在明治大学博物館に収蔵されている。

明治大学博物館が「刑事博物館」と称していた頃当館の神崎氏より折本仕立ての大部な交通図を見せられたが、これが『諸街折絵図』であった。なお、明治大学本は蔵書印からチェンバレン旧蔵のものと思われる。

『五海道分間延絵図』といっても、五街道とそれに付属する街道のほとんどは『分間延絵図』であるが、その他の街道は『見取絵図』である。『分間延絵図』は約一八〇〇分の一であるが、『見取絵図』は『分間延絵図』に比べて精度が落ちるものであった。

水戸佐倉道は日光道中の付属街道ということで『分間延絵図』として作成されたものと考えられる。しかし房総半島対岸の三浦半島には東海道から分岐する浦賀道と江島道が『見取絵図』として作成されている。要するに両道は東海道に付属する街道として扱われていない。このことは五街道に付属する街道とは何かという問題になるので、ここでは指摘に留めておくことにする。

(二) 『水戸佐倉道分間延絵図』に描かれた道筋

① 水戸道の道筋

水戸道は途中迄は佐倉道と同じ道筋である。水戸佐倉道は日光道中千住宿で分岐するが、『水戸佐倉道分間延絵図』には分岐点に石造物らしきものが描かれ「道印石」と記されている。道印石は道標のことあるがこの道標と思われるものは現在足立区立郷土博物館の敷地内に移され保存されている。道標には「水戸海道」と彫られており、裏面には「天明元年」(一七八二)と彫られている。

前述したように江戸時代には街道は海道と書いたが、道標などの場合、「○○海道」とするより「○○道」と彫るのが一般的であった。この道標には設置者等が彫られていない。ことによると設置に水戸藩が関わっていたのかもしれない。

松戸市を通じる国道六号線八ヶ崎交差点には文化三年(一八〇六)の大きな道標が建っている⁽⁴⁾。その正面には「左水戸街道」と彫られている。

「海道」ではなく「街道」である。街道としたのは水戸藩と何らかの関係があるのだろうか。

『分間延絵図』によれば水戸道は千住宿から新宿に達し、ここで水戸道は左に、佐倉道は右に分岐する。しかし水戸道は「是ヨリ水戸道松戸宿の方江引続」と記され、道はここで終っている。

新宿追分金阿弥橋際立より水戸道

松戸宿之方別巻二有之

別巻とは『水戸道分間延絵図』でも作成したということであろうか。杉山氏の調査でも水戸道の『分間延絵図』の存在は確認されていない。それ

とも水戸藩側に『分間延絵図』に匹敵する絵図が残されているのだろうか。『水戸佐倉道分間延絵図』の新宿分岐点には石造道標が描かれ、道標は現存している。道標は安永六年(一七七七)のもので行先は以下のように彫られている。

右 なりた ちば寺道

左 水 戸 街 道

右は佐倉道であるが、成田・千葉寺とある。江戸時代も中期前後から成田参詣が爆発的に盛んになり、成田そして一定の信仰を集めた千葉寺が彫られている。この当時佐倉を目的地とする旅人は少なく、通過地になつていたため、佐倉道の銘文は彫られなかったのだろう。

一方水戸道については「水戸街道」と街道が彫られている。

水戸道は本来新宿で左折するのだが、『水戸佐倉道分間延絵図』では新宿からは佐倉道と同じ街道を行くことになるわけである。新宿からの道は小岩市川関所に向かう。現在の京成電鉄江戸川駅の所在するところである。ここで左折すれば小岩市川関所だが、直進する道も描かれている。この道については次のような記載がある。

元佐倉通り逆井道 江戸両国橋江道法三里

この道を少し進むと「字一里塚」がありそれ以遠は描かれていない。なおこの一里塚の跡は史跡として保存されている。ここで注目すべきは「元佐倉道」であるが、これについては後述する。

小岩市川関所を越えて市川に入ると、街道は左右に分岐する。右は佐倉道であるが、左の道が水戸道である。『水戸佐倉道分間延絵図』に描かれた水戸道は江戸川左岸沿いの道で、矢切村などを通り対岸には柴又帝釈天こと題教寺が所在する。水戸道は松戸宿の外れで途切れ、「是ヨリ水戸小金町之方江引続」と記されている。

水戸道については研究心をそそられるところであるが、本稿の対象外であるので指摘に留めておく。

② 佐倉道の道筋

小岩市川関所を越え江戸川を渡り、水戸道と分岐し佐倉道となる。市川

新田・平田村・菅野村を経て「八幡町」に至る。『水戸佐倉道分間延絵図』には以下のように記されている。

高四百拾七石余

下総国葛飾郡

八幡町

船橋村江一里拾五町

但脇継 小岩村江一里七町

『水戸佐倉道分間延絵図』には松戸は松戸宿とあるが、八幡は「町」である。しかし『水戸佐倉道宿村大概帳』⁵⁾には「八幡宿」と記されている。町から宿へ昇格したということであろうか。それとも宿か町かあまりこだわることなく書いたのだろうか。

道の描写は鬼越村を過ぎた辺りから途切れるというか不明瞭になり「是ヨリ船橋村江道法一里拾五町」と記されている。

道は不明瞭なまま進み、左手に中山法華経寺境内が大きく描かれそれぞれ船橋村に達する。

船橋村で街道は左右に分岐するが、そこには「大神宮」（俗称船橋大神宮）が描かれている。右に分岐する道は上総・安房方面への街道であるが、街道の途切れる辺りに以下のように記されている。

上総国久留里 黒田豊前守城下江 道法十八里余

房州館山 稲葉播磨守陣屋江 道法二十二里余

左に分岐する街道が佐倉道であるが、街道の描写はここで終わり、

佐倉道 堀田相模守城下江 道法七里程

と記されている。『水戸佐倉道分間延絵図』と題しているのに水戸同様佐倉迄描かれていないのである。しかも「見取絵図」ではなく「分間延絵図」である。

二 『佐倉道分間延絵図』作成の背景

(一) 江戸幕府と房総

① 要害としての房総半島

筆者は房総半島が幕府成立時に極めて重要な地であったため、幕府が成立し安定期に入ってもその意識が払拭出来ず『佐倉道分間延絵図』を作成したのではないかとの仮説を立てている。以下その仮説を述べていくことにする。

江戸から至近の地に位置する房総半島は全てが水に囲まれた巨大な要塞である。西は東京湾、南から東にかけては太平洋そして北部は利根川である。利根川が現在のように向かって流れるようになったのは、幕府の利根川東遷事業によるもので一六〇〇年代中頃のことである。しかし利根川開削以前においても現在の関宿方面から銚子迄は湿地帯のような地域が多かったのではないかと思われる。

地形や地理的条件だけではなく、気候温暖な房総半島は農産物の生産量も豊かであり、海産物が豊富であったことは言うまでもない。さらに現在の旭市を中心とした地域は砂鉄の埋蔵量も豊富であった。まさに房総半島は天然の要害の地に相応しい条件が備わっていた。

② 江戸から陸路房総へ

房総半島の要害化とは緊急時に将軍が通行することを想定しているわけである。江戸から房総へ達するには船舶による移動もあるが、緊急時は騎馬による移動であろう。陸路江戸から房総への最短ルートは江戸から小松川・小岩を経て市川に達する街道である。さらにそのまま東に進めば東金方面そして九十九里浜に達する。

明治一九年（一八八六）製版の陸地測量部「迅速測図」の「逆井村」を見ると、中川を渡ったところから市川に向かって直線状の道が通じ、千葉街道と記されている。「迅速測図」は「市川駅」に入るが同じく直線状の

街道で、小松川・小岩を経て新宿からの街道と合流して江戸川を渡り市川に達する。街道は迅速測図の「市川駅」から直線状の街道で「船橋駅」に入り、船橋大神宮で前述のように街道は左右に分岐するが、右の街道は前原新田で佐倉・成田方面への街道と東金方面への道に分岐する。東金方面への街道は將軍が通行した街道ということから、地元の研究者は「東金御成街道」と呼んでいるので、本稿でも東金御成街道と呼ぶことにする。

東金御成街道は迅速測図の「習志野」に入り藤崎・大久保新田・実籾・犢橋を直線状に貫きそのまま直線状に迅速測図の「下志津村」「千葉町」を通るが、見事なまでの直線街道である。迅速測図の「中野村」に入ると金親を経て中田で道は少し曲折し中野村に至る。この辺りで直線状の街道は終わりを告げ東金に達する。

東金が要害としての房総半島の根拠地であったようだが、迅速測図の「成東町」を見ると、東金から再び完全なと言つてよいほどの直線街道が東に向かつて走っている。「蓮沼村」に入ると道は下横地村を経てやや南下し九十九里浜に達している。

以上述べてきた直線状の街道が、全て地域住民の生活のため自然発生的に出来上がったとは考えにくい。一定の目的即ち江戸から房総へいち早く達するために造成されたと考えられるのである。

③東金御成街道に設けられた御殿

將軍が通ることを想定した街道には將軍宿泊用の施設である御殿が建築された。江戸近郊や東海道等各所に設けられている。ここでは東金御成街道における將軍の通行や休泊について『徳川実紀』⁶⁾によりみてみよう。

(元和元年一月一六(一七二七))

○十六日 御所江城を出まし舟橋に至らせ給ふ。これは土井大炊頭利勝が所領下総佐倉にて。鷹狩したまはんとてなり。この日 大御所は下総の千葉に至らせ給ふ。○十七日 御所船橋より佐倉に渡御あり。大御所は東金に狩し給ふ。○十九日太田撰津守資宗を御使として。東金の御旅館につかはされ。大御所資宗に下坂康継の御刀をたまひ。また今夜伴食せしめらる。廿五日 大御所東金より船橋へ

至らせ給ふ。今夜船橋市中失火し。民居悉く焼失すといへども。御旅館は恙なし。廿七日 大御所江戸にかへらせ給ふ。

(元和四年一〇月二九(一七一三))

○廿九日越谷辺御鷹狩にならせ給ひ。これより連日御泊狩ありて。土気東金までならせらる。井上主計頭正就。水野監物忠元。永井信濃守尚政。阿部備中守正次青山大蔵少輔幸成をはじめ。医員今大路道三親清等も御供す。儒役林永喜信澄も同じ。蜜柑一箱献じ御氣しきをうかがふ。○六日御狩場へ金地院崇伝使もて。蜜柑一箱献じ御氣しきをうかがふ。○十二日東金辺御狩はて、御帰城あり。

(元和六年九月一六日)

○十六日 大納言殿東金辺へ御狩にならせらる。池田帯刀長賢御使して魚物進らせらる。

(元和七年一月二日(一七二二))

○三日東金辺御鷹狩あるべしとて出た、せ給ふ。○廿八日昨日雨ふりければ。けふ東金の御狩場につかせ給ふ。大納言殿より土井左兵衛正次を御使として御けしきうかがはせ給ひ。魚物進らせたまふ。

○十二月三日東金の御狩場より。越谷をへて還御なる。

これにより徳川家康・秀忠が東金御成街道を通行し鷹狩を行っていたことを知ることができる。

元和元年(一六一五) 十一月一六日の条に「御所江城を出まし舟橋に至らせ給ふ」とあるのは徳川秀忠が船橋に設けられていた將軍休泊用の施設「御殿」に達したということであり、「大御所は下総の千葉に至らせ給ふ」というのは、徳川家康が千葉市若葉区御殿町に設けられていた「御殿」に達したということである。

さらに一七日の条に「東金の御旅館」とあるのは、東金御殿のことである。要するに江戸から東金に達する街道には船橋・御殿町・東金の三ヶ所に御殿が建てられていたのである。

船橋御殿は船橋大神宮手前の左側辺りにあったようだが、現在は小さな東照宮が祀られている。

千葉御殿は「御茶屋御殿」とも呼ばれているが土塁と堀が非常に良好な

状態で残されており千葉市の指定史跡になっている。

東金御殿のあった場所は東金高等学校の所在地で、その前の八鶴湖は御殿の庭の池として開削されたという。

江戸から東金への沿道に建てられた御殿は徳川家康等將軍の鷹狩のためと言われているが、幕府草創期に遊樂としての鷹狩だけが行われたとは考えにくい。鷹狩は恐らく軍事訓練でもあっただろう。さらに房総半島要塞化の一環として鷹狩を通して軍事道路としての東金街道を造成したのである。

東金に達した街道はさらに直線状に九十九里浜まで伸びているが、万一の時は船舶の利用も可能であったわけである。旭市方面の砂鉄については前述したが、この方面での聞き取りによれば、戦時中は大量の砂鉄が貨車で運ばれたという。砂鉄輸送は戦後も続き掘削跡に水が溜まりここで子供が溺れたそうである。

三 江戸幕府の交通政策と佐倉道

江戸から小松川・小岩を経て市川・船橋に達する街道は江戸時代初期には土井氏が藩主である佐倉へ達する街道であり前原新田からは東金への街道が派生していた。佐倉・東金共に重要拠点である。筆者としてはこの街道を東金街道あるいは東金御成街道としたいが、江戸時代の文献には佐倉道と表記されている。『新編武蔵風土記稿』⁽⁷⁾によると随所に「元佐倉道」という記載を見出すことができる。いくつかその例を示しておく。

○東小松川(中略)村内に行徳道かかれり、西は小松川より入西一之江村に達す、元佐倉道は西小松川村より松本村へ達せり、

○中小岩村(中略)村内南の方に元佐倉道かかれり、
一里塚 江戸川通、堤の上元佐倉道にあり、

また同書の葛飾郡の総説⁽⁸⁾には、

又元佐倉道とて本所堅川通亀戸逆井渡を渉り、小松川村小名四ツ又と云処より西路に別れ、左して下総国市川村に達す、右すれば今井村に出て行徳に達す、

とある。延宝二年(一六七四)五月幕府は東海道・中山道・日光道中・奥州道中・甲州道中の五街道各宿に對して助成金を貸付けているが、五街道以外に「佐倉海道」の宿場が貸し付け対象になっている⁽⁹⁾。「元佐倉道」ではなく「佐倉海道」であり、佐倉海道は五街道に匹敵するような扱いである。

佐倉海道
八幡 小松川 小岩

合三ヶ所 右錢高合千五拾貫文
壺ヶ所三百五拾貫文宛

これによれば佐倉道の交通集落―宿駅として良いか判断し難い―は江戸からであると小松川・小岩・八幡ということになる。しかし何故八幡迄なのであろうか。例えば船橋が助成対象になっていない。さらに水戸道も助成対象とはなっていない。

多くの疑問点は残るが、本来の佐倉道は新宿経由ではなく、堅川通りから小松川・小岩・八幡であったことは明らかである。

佐倉道の行きつく先の佐倉は江戸の東方の要衝であり、徳川家康の重臣土井利勝が藩主として封ぜられている。江戸幕府にとつての要衝という観点からみれば例えば川越も同様で、同じく徳川家康の重臣である酒井重忠が封ぜられている。しかし川越街道は佐倉道のような扱いは受けていない。要害としての房総半島の拠点となる東金方面への街道はことさら公にする街道ではなかったであろう。佐倉道というより東金方面に達するには、江戸から江戸川を無事に渡りきればよかつたのである。そのためには小松川・小岩が重要拠点であり、江戸川を渡り八幡迄達すれば、後は船橋・千葉の御殿を経由して東金御殿へと達することができたわけである。

それでは何故「佐倉」としたのであろうか。これについて明らかにすることは不可能である。東金を伏せるため佐倉という名称を前面に押し出したといいたいところであるがこれはあまりにも穿つた見方である。

おわりに

以上述べてきたことを基にして『水戸佐倉道分間延絵図』を見てみよう。『水戸佐倉道分間延絵図』が作成されたのは一八〇〇年代初めの頃である。表面的に考えるならば当時水戸・佐倉迄描かない「分間延絵図」を作成する必要などなかったであろう。

関所が設けられていたからとも考えて見たが、水戸道は金町・松戸関所には向かっていない。それでも「分間延絵図」が作成されたということは、一八〇〇年代に入っても幕府上層部は房総半島を要害の地として認識していたからであろう。

そこまでの認識は無かったかもしれないが、房総の地は重要な地として伝えられてきたのかもしれない。

このような認識があったからこそ『水戸佐倉道分間延絵図』が作成されたのである。

注

- (1) 筆者は以前当館紀要4号(平25)に「海道・街道と交通路の名称」において、江戸時代には街道と書くことはすくなく、海道が一般的であったことを述べた。分間延絵図は現在では「五街道」と書かれるが、原本には『五海道分間延絵図』と書かれている。そのため本稿では一般的記述のときは「街道」とするが、資料に「海道」とあるときは「海道」と記す。
- (2) 『郵政資料館研究紀要 6号』(平27) 所収「『五街道分間延絵図』と『宿村大概帳』の制作」
- (3) 『国立歴史民俗博物館研究報告 50集』(平5) 所収「五街道の付属街道に関する一考察」・『かつしかの道総合調査報告書』(平5) 所収「五街道と水戸佐倉道」
- (4) 金田英二著『房総の道標』(平9) 自費出版
- (5) 児玉幸多校訂『近世交通史料集 6』(昭47) 吉川弘文館
- (6) 『新訂増補国史大系 39』(昭39) 吉川弘文館
- (7) 大日本地誌大系8『新編武蔵風土記稿』二(昭四五) 雄山閣
- (8) 同右7『新編武蔵風土記稿』一
- (9) 児玉幸多編『近世交通史料集』八「幕府法令上九五号史料」(昭五三) 吉川弘文館